

小高 稔先生を偲んで

東京メディサイトクリニック
山口哲生



小高 稔先生 近影

小高 稔先生は筆者の前任の日本サルコイドーシス学会の事務局長であり、第12代JR中央保健管理所（旧国鉄中央保健管理所，現JR東日本健康推進センター）の所長であった。

小高先生のことについて記す前に、簡単に国鉄中央保健管理所の存在について記しておきたい。

わが国の結核死亡率は1937年に人口10万対200を突破し、終戦時には280.3と史上最高に達した。国鉄職員の結核による休業率は1937年には1.8%であったが、1942年には4.3%に達していた（当時は軍の機密であった）。この状況下で東鉄（東京都鉄道局）は、国鉄本省の反対を押し切って保健課内に体力管理係をおき、1940年には医師1名（千葉保之先生）、レントゲン技師1名、事務3名、看護師6名の結核対策実働部隊が編成されて国鉄中央保健管理所のルーツとなり、我が国の結核対策の見本となった。

第2回肺線維症研究会が開催された1974年には10万対の結核死亡率は10.0にまで減少してきたのだが、かわって台頭してきたのが間質性肺炎とサルコイドーシスである。「サルコイドーシス、肺線維症という新しい疾患をめぐって、多くの学者たちが中央保健管理所に集まり、学問交流のサロンとなった」と故・細田裕先生は記している。

小高先生はそのなかで、みなのもとめ役として静かに活躍しておられた。1981年にサルコイドーシス研究協議会（のちの本学会）が理事長に千葉保之先生を戴いて組織されたわけだが、小高先生は、当初から事実上の事務局長として、会費集め、会計、Newsの編集と発行などすべての

事務局の仕事をなされていたと聞く。めだつことはなさらず、いつもニコニコと飄々とされておられたが、小高先生にお願いしておく、なんとなく穏やかにまともっていくという評判であった。

筆者が三上理一郎先生、細田裕先生、小高稔先生から本学会の事務局を頼まれて引き継いだ丁度そのころ、1991年7月に小高先生は第12代JR中央保健管理所所長に就任された。保健管理所内もサルコイドーシス学会内も、いろいろな事があったであろうが、まるで何事もなかったかのように、静かに穏やかにまともっていくというのが小高流であった。

1993年の中央保健管理所報の巻頭言に小高先生は次のように書かれている。「健康管理、職場巡視、職場環境管理に加えて人間ドックなど、所員は益々多忙をきわめているが、いずれも、健康という最高の贈り物を社員にプレゼントするためと思えば、苦勞も吹き飛んでしまう。社員から空気のような存在として受けとめられるようになれば成功というのが、30年余の経験から得た私自身の思いである」と。

小高稔先生は、2015年4月11日に逝去された。直前にお見舞いにかがったときにも、変わらぬ穏やかな笑顔で迎えてくださったことが思い出される。

小高先生、どうぞやすらかにやすみください。

〔追悼文〕

小高稔（おだか みのる）先生のご略歴

昭和7年7月27日生まれ.

昭和33年3月千葉大学医学部卒.

昭和37年3月国鉄入社. 東京保健管理所医員.

昭和42年2月医学博士学位授与（千葉大院）.

平成3年7月中央保健管理所所長.

平成6年3月退職.

その後は、一般財団法人労働医学研究会所長として健診業務に従事.

平成27年4月11日没.